

バイリンガル吃音者の非流暢性症状と心理面について

○大江 卓也¹⁾ 酒井 奈緒美²⁾ 宮本 昌子³⁾

1)筑波大学 人間総合科学研究科 障害科学専攻 2)国立リハビリテーションセンター研究所 感覚機能系障害研究部 3)筑波大学 人間系

I. 目的

バイリンガル吃音者は発達の過程や環境において、言語の熟達度と流暢性に変動を起こしやすいと述べていることから、個々の背景に着目する必要があると思われる (Jankelowitz & Bortz, 1996)。また、バイリンガル吃音者の非流暢性は、言語的要因の影響に加え、心理的要因の影響を受けることも示唆されていることから、バイリンガル吃音者の心理面に着目する必要があると思われる (Takizawa, 1994)。

そこで本研究では、質問紙「あなたについて/バイリンガルと吃音について」、音読、自由会話、Yaruss and Quesal (2006)が作成した OASES (Overall Assessment of the Speaker's Experience of Stuttering) の日本語版 (Sakai, Chu, Mori, & Yaruss, 2017) を研究協力者に実施することで、バイリンガル吃音者の非流暢性症状と心理的側面を分析し、バイリンガル吃音者の非流暢性症状と心理的側面の検討を試みた。ここでは、第一言語を「L1」、第二言語を「L2」、第三言語を「L3」と記載した。

II. 方法

1) 対象者：7歳以上のバイリンガル吃音者5名 (P1~P5) に対し、Schäfer (2008) を参考に作成した質問紙と自由会話 (200文節以上)、年齢に応じた日本語版 OASES (Overall Assessment of Speaker's Experience of Stuttering) (Sakai et al., 2017) を実施した。

本研究で、吃音のある者は吃音を主訴として相談機関を利用している者、あるいは自助団体の活動に参加している者である。バイリンガルは、「二つ以上の言語で話すことができる」であり、「海外での一定期間の在住歴がある」あるいは「片親が外国人であること」とした。本研究では、バイリンガルを「コミュニケーションの場で、場面に応じて二つ以上の言語を使い分けるような人」とした (芳賀, 1988)。聴覚障害、知的障害を合併していないことを条件とした。

2) 手続き：質問紙「あなたについて/バイリンガルと吃音について」の回答後、音読と自由会話 (総発話文節数200文節以上) を行った。その後、年齢層に応じた OASES を配布した。OASES は自宅で記入し郵送するよう依頼した。自由会話と音読を実施する際には、分析のために録音と録画の許可を得た。

3) 分析方法：音読・自由会話の非流暢性症状は吃音検査法第2版 (小澤ら, 2016) に従い、「吃音中核症状」と「その他の非流暢性症状」に分けて分析し、各種症状についても分析した。加えて OASES インパクト得点を算出し、インパクト評定を用いて吃音が個人の生活にどのような影響を及ぼすのかについて調べた。

OASESとは？

OASESは吃音者が抱える困難を、WHOの国際生活機能分類のモデルに基づき4つのセクションから包括的に評価する質問紙で、「一般的な情報」、「吃音へのあなたの反応」、「毎日の生活の中でのコミュニケーション」、「生活の質」という4項目の構成になっている。7~12歳は OASES-S、13~17歳は OASES-T、18歳以上は OASES-A と年齢別に依拠している。

III. 結果

音読と自由会話の非流暢性症状を分析した。非流暢性症状は吃音中核症状とその他の非流暢性症状に分けて分析し、各症状の種類についても Figure 1-5 に分類した。研究協力者の非流暢性症状に共通していることは、①吃音中核症状よりその他の非流暢性症状の方が多く生起していた、②その他の非流暢性症状の中で、圧倒的に挿入 (Ij) が多かったことである。その他には、瞬きをする随伴症状や目を逸らしたりする情緒性反応が全員に確認された。

OASESの結果よりインパクト得点を算出し、インパクト評定を用いて研究協力者の吃音が個人の生活にどのような影響を及ぼしているかについて調べた。インパクト得点は、4つのセクション毎に、得点 (A) を実施項目数 (B) で割った数値である。研究協力者の OASES の結果に共通していることは、研究協力者全員の傾向としてセクション2の「吃音へのあなたの反応」のインパクト得点が高かったことである。さらに、全員が吃音に関することで否定的な経験をしたことがある、と話していたにも関わらず、全体的には「中程度」の評定を受けた項目が多かった。

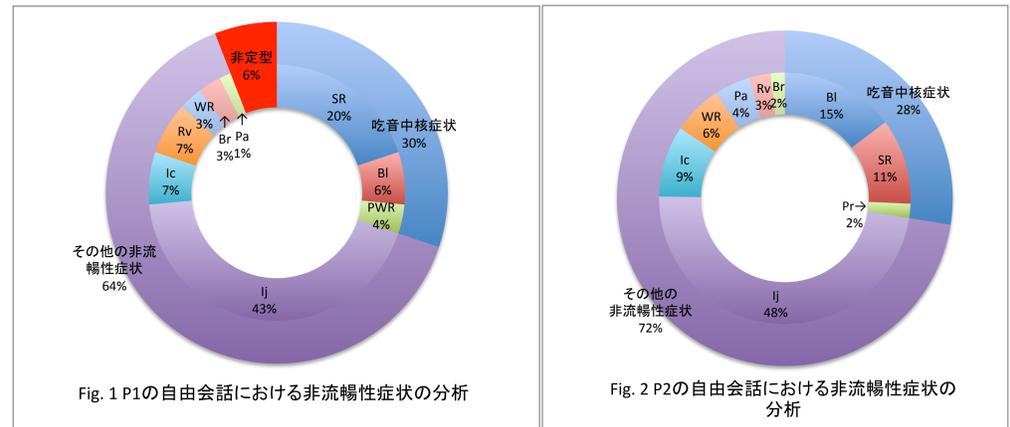


Fig. 1 P1の自由会話における非流暢性症状の分析

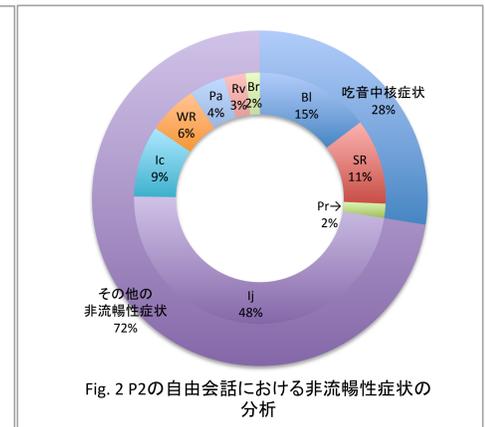


Fig. 2 P2の自由会話における非流暢性症状の分析

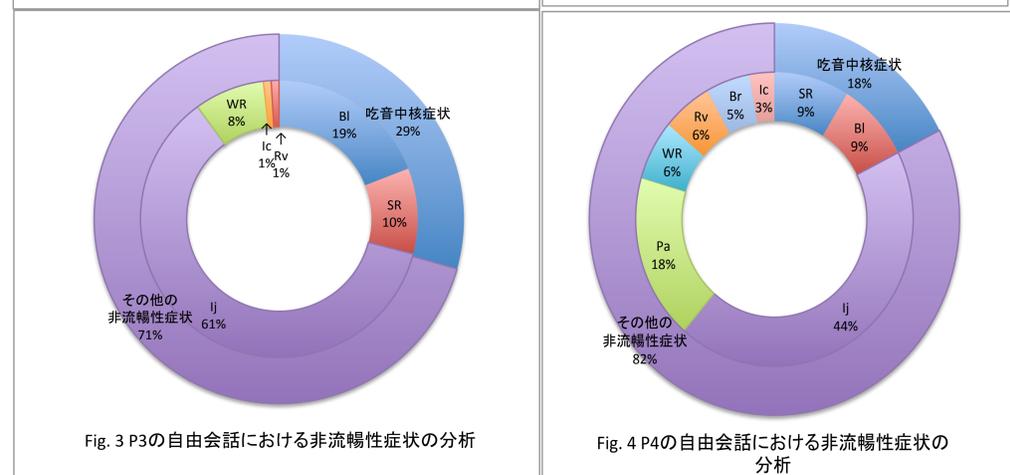


Fig. 3 P3の自由会話における非流暢性症状の分析

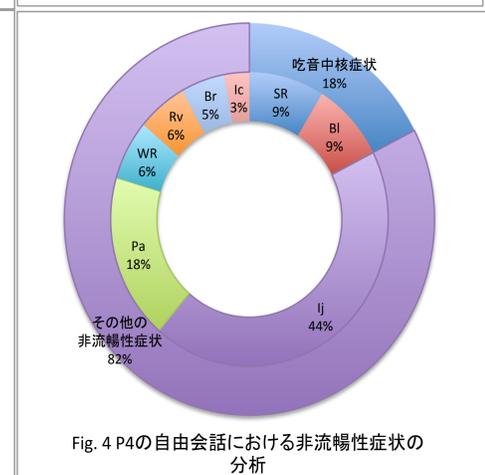


Fig. 4 P4の自由会話における非流暢性症状の分析

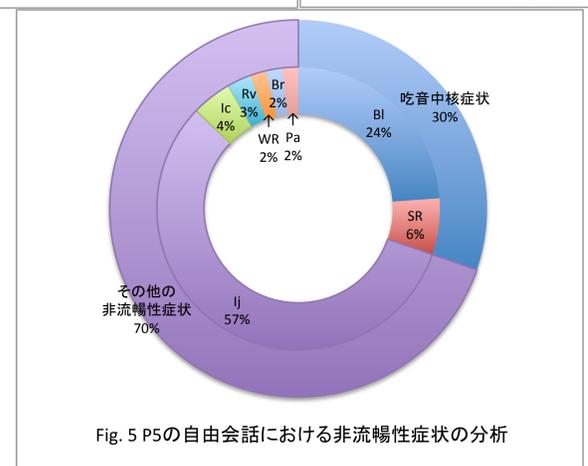


Fig. 5 P5の自由会話における非流暢性症状の分析

注1: 二重円グラフの外側は総非流暢性数における吃音中核症状、その他の非流暢性症状、非定型非流暢性症状の割合。内側はこれらの非流暢性症状内における種類の分類とその割合。
注2: 吃音中核症状 (SR: 繰り返し、PWR: 語の一部の繰り返し、Pr: 引き伸ばし、Bl: 阻止)
注3: その他の非流暢性症状 (WR: 語句の繰り返し、Ij: 挿入、Ic: 中止、Rv: 言い直し、Br: 途切れ、Pa: 間)
注4: 非定型非流暢性症状 (atypical disfluency) は吃音中核症状とその他の非流暢性症状には加えない。
注5: 小数点第1位で四捨五入した。

IV. 考察

本研究では、大多数の先行研究と同様に、研究協力者全員が全ての言語において吃音症状が出ていると回答しており、P5以外はその言語間で吃音の程度に差があると回答した。Nwokah (1988) の Difference Hypothesis の定義に当てはまるバイリンガル吃音者が大多数であることから、日本語と外国語でも同様の結果である可能性が高いと考えられる。

自由会話の非流暢性を分析した結果、極めて挿入 (Ij) が多いことが確認できた。これは LaSalle and Huffman (2015) の日本におけるモノリンガル吃音者の非流暢性症状に関する論文とは異なっており、Lee, Sim, and Shin (2007) の韓国語と英語のバイリンガル吃音者に関する論文で見られた挿入の多さと類似しており、認知的負荷による適切な単語検索の難しさが関係していることが考えられる。

OASESの結果でセクション2がセクション間の中で最も得点が高かったのは先行研究と同様の結果になった。OASESの総合インパクト得点については、4名が「中程度」であった。モノリンガル吃音者よりもバイリンガル吃音者の方が心理面において吃音に影響されているとは言い難いため、更なる検討が必要である。